

アスペクト複合動詞「～漏らす」の歴史的検討

百留 康晴

Yasuharu HYAKUTOME

A historical study of aspectual compound verbs “～ morasu”

要 旨

日本語の「動詞+動詞」型複合動詞には「言い漏らす」「書き漏らす」「聞き漏らす」など二つの動詞が補文関係の意味関係を形成する語彙的複合動詞「～漏らす」が存在する。このような語彙的複合動詞は近年影山（2013）によりアスペクト複合動詞と捉え直され、日本語複合動詞の謎を解く手がかりがあるものとされる。本論はこの語彙的アスペクト複合動詞「～漏らす」についてその発生と展開を歴史的な視点から明らかにすることを目的とした。その結果、このような複合動詞は平安時代から見られるもののその意味関係は現在とは異なり、二つの動詞の意味を文脈の支えをもとに重ね合わせたものであることが明らかになった。現代語における補文関係の意味関係が見られるのは鎌倉時代以降で新たに生まれた「討ち漏らす」の意味関係を既存の「書き漏らす」「聞き漏らす」「見漏らす」に当てはめ、再解釈したことによると考えられる。

【キーワード：語彙的複合動詞、アスペクト複合動詞、主題関係複合動詞、「～漏らす」】

はじめに

本論は二つの動詞が補文関係の意味関係を形成する語彙的複合動詞「～漏らす」についてその発生と展開を歴史的な視点から明らかにすることを目的とする。

第1節では近年の複合動詞研究を踏まえた本論の研究的背景について述べる。第2節では本論の直接的な先行研究について言及し、本論との関係について述べる。第3節では動詞「漏らす」の意味用法の変遷を明らかにする。第4節では複合動詞「～漏らす」の発生および意味用法の変遷を明らかにする。おわりにではまとめと課題を述べる。

1. 問題の所在

影山編（2013）は「現代日本語における複合動詞の仕組み」「複合動詞の歴史」「外国語との対照」という3つの視点から精密な13編の論考が収められ、現時点における動詞+動詞型複合動詞研究の一つの到達点と言える。影山（2013）はその冒頭に置かれ、全体の内容に関わる重大な提案をしている。興味深いのは日本語複合動詞の「謎」として以下のA～Eを提示し、その謎を解くための手がかりが語彙的複合動詞におけるアスペクト複合動詞にあるとした点である。

- A. 統語的複合動詞と語彙的複合動詞の関係
両者は構造的に別のものか、それとも何らかの連続性を持つのか？
- B. 語彙的複合動詞の編成
語彙的複合動詞と呼ばれているものは、構造的に一樣なのか？
- C. 他言語との対象
アジア諸言語の中でも日本語の複合動詞は際だって多様であるとされるが、問題は数（量）ではなく質（複合動詞のタイプ）の相違にあると推測される。他言語と比べて、日本語の特徴となるタイプの複合動詞とはどのようなものか？
- D. 歴史的発達
複合動詞は、どのように歴史的に変化してきたのか
- E. 言語習得
第一言語習得および第二言語習得において、習得上で問題となる複合動詞は理論的にどのように予測できるか？

影山（1993）では複合動詞が語彙的複合動詞、統語的複合動詞の二つに区別されるべきものであるということが示され、その後の複合動詞研究における新たな理論的枠組みを提供した。影山（2013）では新たに語彙的複合動詞を「V1て、V2」と言い換えることができるかどうかを基準とし、大きく主題関係複合動詞とアスペクト複合動詞とに分類するという提案がなされた。影山（2013）

* 島根大学教育学部言語文化教育講座

によればこの提案の背景に以下のことがある。

これまで影山 (1993, 1999)、松本 (1996, 1998)、由本 (2005)、Fukushima (2005) などに代表される研究では、語彙的複合動詞を構成する2つの動詞の意味関係を分類し、それらの意味がどのようにして解釈されるのかという点を中心的な研究課題としてきた。これまで想定されてきた意味グループは以下のように整理される。

- a. 手段：V1することによって、V2
突き落とす、切り倒す、踏みつぶす、押し開ける、折り曲げる、切り分ける
- b. 様態：V1しながらV2
流れ着く、転げ落ちる、忍び寄る、舞い降りる、語り明かす
- c. 原因：V1の結果V2
歩き疲れる、抜け落ちる、焼け死ぬ
- d. 並列：V1かつV2
忌み嫌う、恋い慕う、慣れ親しむ
- e. 補文関係：V1という行為／出来事を (が) V2
見逃す、編み上がる、死に急ぐ、聞き漏らす
- f. 副詞的關係：V2が副詞的にV1の意味を補強
晴れ渡る (= すっかり晴れる)、使い果たす (= 全部使う)、居合わせる (= たまたま同じ場所にいる)

以上の分類は一見、分りやすいものの、実際に観察されるすべての語彙的複合動詞がこれらの6分類のいずれかに曖昧さなく振り分けることができるかどうかは疑問であり、語彙的複合動詞の前項動詞と後項動詞の意味関係を明示的な意味カテゴリーとして設定することは、あまり有意義とは思えない。

上記の背景のもと影山は「V1て、V2」と言い換えられかどうかを基準とする新しい意味タイプ、主題関係複合動詞・アスペクト複合動詞を提案している。主題関係複合動詞は「V1て、V2」と言い換えることができるタイプで、従来の分類では手段、様態、原因、並列の意味関係と分類されてきたものである。主題関係複合動詞はV1、V2ともに主題関係(項関係)を持ち、V1はV2を様々な意味関係で修飾するとされる。アスペクト複合動詞は「V1て、V2」と言い換えることができないタイプで、従来の分類では補文関係、副詞的關係の意味関係と分類されてきたものである。アスペクト複合動詞は文の項関係は基本的にV1によって決まる。V2は広い意味で語彙的アスペクトを表し、V1が表す事象の展開について述べるとされる。

影山によれば語彙的複合動詞における主題関係複合動詞は複合動詞として他の言語にもよくあるタイプであるのに対して、アスペクト複合動詞はほとんど日本語特有と言ってよいぐらい稀なタイプであるとされる。前述のA~Eの謎を解くための手がかりがなぜアスペクト複合動詞にあるのかと言えばこのタイプの複合動詞が構造的に主題関係複合動詞より統語的複合動詞に近い性質を持ち(A、B)、他言語ではほとんど見られず(C)、歴史

的発達においても言語習得の過程においても、このタイプの複合動詞が特異な性質を持つと推測される(D、E)ためであるとする。

さて、従来日本語の語彙的複合動詞において補文関係と分類されてきた複合動詞はその意味解釈に多くの問題を抱えているとされる。影山の新しい分類ではこれらは副詞的關係と分類される複合動詞とともにその全てがアスペクト複合動詞となると考えられる。しかし、これは演繹的に構築されたものであり、補文関係、副詞的關係と分類されるものに全体としてどのようなものがあり、個々の意味解釈がどうなされ、その意味関係が統語的複合動詞と同じような補文関係と見なし得るか、アスペクト複合動詞の概念にふさわしい意味関係を構成しているか等についてさらに詳細な検討が必要であると考ええる。

私見では補文関係、副詞的關係と分類される語彙的複合動詞の意味解釈に多くの問題が存在するのは歴史的な成り立ちが関係していると考ええる。しかし、複合動詞の歴史的研究の分野では個別的な複合動詞の記述自体があまり進んでおらず、理論的研究に資する実態解明が進んでいない現状がある。また影山はアスペクト複合動詞におけるV2は語彙的アスペクトを表すという機能的な役割を担うものになっているとし、その現象を文法化と呼ばれる変化過程の一つと捉えている。しかし文法化は本来歴史的な現象であり、その動態を解明していく必要がある。また個々の動詞がどのような語彙的アスペクトを表すようになるのかということについてはその動詞本来の語彙的意味、時代背景等の個別的な要因が大きいと考ええる。したがって共時的な視点からの研究では一定の制約があり、全体像を解明することはできず、歴史的な視点から意味の発生や変遷を具体的に考察していかなければならないと考える。

そこで本論では語彙的複合動詞において補文関係の意味関係を構成するとされる「～漏らす」を対象とし、その発生や意味関係の変容を歴史的に検討する。そのことでアスペクト複合動詞をめぐる問題の一端を明らかにし、複合動詞研究全体に対して有益な提案を行いたい。

2. 先行研究

ここでは本稿の直接的な先行研究について触れる。まず語彙的複合動詞「～漏らす」の意味関係が先行研究でどのように分析されてきたのかを確認しておく。まず影山 (1993) 110~111頁は語彙的複合動詞のうち補文関係に分類されるものとして「～漏らす」を挙げ、「書き漏らす」「聞き漏らす」を語例として示している。意味は「失敗」とされる。また由本 (2005) 153~154頁は事象の不完全さや不履行を表す補文関係タイプとして「～漏らす」を挙げている。これらから当該複合動詞は従来その意味関係を補文関係と分析されてきた語彙的複合動詞であることが確認される。

また杉村 (2007) は現代日本語において行為の失敗を表す点で共通する複合動詞「一忘れる」「一落とす」「一

漏らす」の使い分けを論じている。インターネットのWWWページを利用したコーパス調査、大学一年生を被験者としたアンケート調査から「一漏らす」と共起する動詞の上位に「撃つ」「討つ」「打つ」といった打倒行為、「聞く」「書く」「言う」など言語生活に関する行為、「買う」「取る」「撮る」など取得に関する行為が集中していることを指摘している。また複合動詞「一漏らす」は以下の本動詞「漏らす」の意味④⑤に対応して、①②の意味を持つとしている。

動詞「漏らす」	複合動詞「一漏らす」
①対象をこぼす (例)ビールを漏らす。 水を漏らす。	(例)*{ビン/ビール}を割り漏らす。 (例)*水を流し漏らす。
②心の内をあらわにする (例)不満を漏らす。	(例)*不満を言い漏らす。
③情報などを漏洩する (例)秘密を漏らす。	(例)*秘密を言い漏らす。
④取り逃がす (例)敵を漏らさず討つ。	①～するのに失敗し、取り逃がす (例)撃ち漏らす、討ち漏らす、打ち漏らす
⑤リストなどから抜け落ちる (例)名簿から名前を漏らす。	②うっかりしてすべき事項の一部を抜かす (例)聞き漏らす、書き漏らす、買い漏らす、言い漏らす

杉村は森田(1989)253頁の以下の記述に対して

「一おとす」は、ほんやりしていたり、不注意・うっかりなどが原因で知らぬ間にその行為を怠っているような場合によく用いる。無意識の失敗である。

「一もらす」は、注意し努力していたにもかかわらず、その対象をとらえることにしくじる場合。しかし、例(11)は意図性が希薄で不注意の場合であるにも関わらず、「一落とす」より「一漏らす」の方が自然であると指摘する。そして「一漏らす」で特徴的なのは、「一言も～し漏らさない」、「一つも～し漏らさない」のようなコロケーションが多く見られる点にあるとする。(11)ぐっすり眠っていたので、銃声を聞き「漏らした／?落とした」。

他にも例(12)を示し、このような例の存在から、「一漏らす」は対象の一部を捕り逃がしてしまうことに重点があると考えられるとする。

(12)まずは全身を「耳」にして、遠くのかすかな声も聞き漏らさないように注意しながらチンパンジーの居場所を突きとめます。

杉村の示した本動詞「漏らす」の意味と複合動詞「一漏らす」の意味との対応から「～漏らす」の形成する意味構造は「漏らす」の④⑤の意味に対応していると判断される。また、意図性が希薄であるという点も「～漏らす」の用法を捉える上で重要であるとする。しかし、例(12)をめぐる杉村の記述からは「漏らす」の④⑤の意味が同時に重ね合わせられているように見え、「漏らす」における④と⑤の意味の派生関係がどのようになっているの

か、また④⑤の意味と「～漏らす」の形成する意味関係との関係性については不透明である。そこでこの点について歴史的な視点から本動詞「漏らす」における④⑤の意味の派生のプロセスを明らかにし、と当該意味構造の形成との関連性を考察する必要があると考える。

歴史的研究の分野における先行研究として西田(1989)(1990)がある。西田は自動詞「漏る」を中心とし、他動詞「漏らす」、「漏る」を前項とする複合動詞「漏り～」などをも含め、「漏る」の語義、用法の展開を検討した。

西田(1989)は以下の『馬内侍集』82・83番歌の「漏る」の用法をめぐる「贈答歌の解釈を絡ませつつ、「漏る」という動詞の用法の展開について検討した」ものである。

左大将、兵衛佐にておはせしとき、うづきに物をいひそめたまひて

ほととぎすこゑをばきけど花のえにまだふみなれぬ物をこそおもへ

かへしかしは木のわかき葉にさして

ほととぎすしのぶるものをかしはぎのもりても声のきこえけるかな (馬内侍集 82・83番)

西田によれば、平安中期頃まで和歌における「漏る」の例は大部分が「水」に関するもので一部「光」が漏れてくるのを表わす例が見られるものの「音」が「漏る」とする確実な例は見られない。仮名散文作品においても「水」「光」の例は見られるものの、「音」の例は見られない。「音」に関する例は時代が下って仮名散文では『栄花物語』に一例見出し、和歌では『千載和歌集』の頃から見られる。

そのような用法が「漏る」に発生した理由として西田は和歌の方からはその場面において「漏る」が「音」と関連するようなことが多かったことを挙げ、また散文の例からは話や秘密が漏れることについて多く「漏る」が使用されたこと、散文では和歌の例よりも時期的に早く、「音」の「漏る」例が『栄花物語』において見られたことが和歌における「漏る」の詠まれ方の広がりをも招来したと述べている。

また西田(1990)は平安朝の仮名散文における「漏る」の用法展開を詳細に明らかにしている。要点をまとめる以下ようになる。

- ・「源氏物語」以前には使用数自体が少なく、その多くが和歌の例である。
- ・その例が「源氏物語」以降増加し、それも長編の物語において、特にその傾向が著しく、それを境として、作品中の和歌での例が減少する。
- ・「源氏物語」以前の作品での「漏る」は和歌の発想を引き継ぐものが多く、「水」に関するもの「月の光」が漏れるとするものが大部分である。抽象的な「秘密のこと」の類を対象とするのは、意図的に対象を「漏らす」場合だけに限定され、「宇津保物語」に3例見出されるのみである。
- ・「源氏物語」では「秘密の話」「心中」の類の何らかの

事態を表す例が中心であり、「袖口」「水」「月の光」「人の姿」など事物を対象とする例は少数である。また、「音」自体が「漏る」となる例は存在しない。

・仮名文学における「音」を「漏る」の対象とする確実な例は「栄花物語」の例である。「音」についての「漏る」という例が現れたのは、「秘密の事態」から「秘密の会話」さらに「秘密の手紙」というような漏れては困るものという一連の流れの中である。

西田（1989）（1990）は動詞「漏る」の中古における用法の展開を詳細に明らかにした。しかし、論文の目的に直接関係しないこともあってか、以下の中古における「漏る」「漏らす」の相違点には触れられていない。

・「漏る」が「月の光」「水」等、自然物を主体とするものが多いのに対し、「漏らす」は「秘密」「話の内容」「気色」など人に属するものを対象とする用例が多い。
・「漏らす」には草子地に見られる「そのことを書く内容から除く」という用法が存在する。

中古における動詞「漏らす」の意味用法に観察されるこれらの点は複合動詞「～漏らす」が形成する意味関係の成立を明らかにするための重要な手がかりが含まれていると考える。そこで本論では中古における「漏る」の用法展開を踏まえつつ動詞「漏らす」の特色に焦点を当て、当該意味構造の成立について論じていきたい。

3. 動詞「漏らす」の意味変化

3.1 中古における「漏らす」の意味用法

まず複合動詞「～漏らす」を構成する動詞「漏らす」における中古から中世にかけての意味変化を記述する。拙論（2015）でも「漏らす」の意味用法は記述した。しかし、自動詞「漏る」との用法上の自他対応を明らかにすることに力点を置いたため自動詞「漏る」の意味記述にも紙幅を割き、複数の動詞の意味用法およびその変遷を俯瞰するような記述となっている。本論では重複を避けつつ、拙論で割愛した部分も入れながら改めて「漏らす」の意味用法を中心に整理したい。

拙論でも確認したが、「漏らす」と語根を同じくする自動詞「漏る（四段活用）」は上代成立の『万葉集』に用例が確認できる。用例を1に示す。しかし「漏らす」は上代には用例が確認できず、確認できる最古の用例は中古の用例である。このことから形態的側面からだけでなく、歴史的な用例の現れ方からも「漏る（四段活用）」から「漏らす」が派生した蓋然性が高いと考える。

1 天飛ぶや 雁の翼の 覆ひ羽の いづく漏りてか
霜の降りけむ 万葉集 2238

表1 中古・中世における「漏らす」の目的語

	中古	%	中世	%
雨・水・涙	3	3.8	2	4
内容	51	65	13	27
気色・気配	20	25	0	0
浮名	3	3.8	0	0
歌	1	1.2	0	0
文	1	1.2	0	0
人	0	0	30	61
物	0	0	4	8
計	79	100	49	100

表2 中古における「漏らす」の用例数

	漏らす
伊勢物語	1
宇津保物語	3
源氏物語	57
夜の寝覚	8
浜松中納言物語	1
狭衣物語	7
栄花物語	2
計	79

表3 中世における「漏らす」の用例数

	漏らす
保元物語	3
平治物語	4
平家物語	11
発心集	2
宇治拾遺物語	1
とはずかたり	4
曾我物語	9
太平記	12
義経記	3
計	49

用例を分析した結果、中古における「漏らす」の基本的意味は「何らかの遮蔽物を通過し、対象がその外に現れるようにする」というものであると考えられる。しかし、仮名散文資料における「漏らす」の目的語から用法を整理するとその目的語は「雨・水・涙」といった自然物と「人が内に抱える様々な内容」「気色・気配」といった人に内在するものに大別され、全用例に占める割合では後者の方が高いことが分った。このような目的語の違いにより中古における「漏らす」の意味用法は以下のように分化している。

- ①「雨・水」などの液体が何らかの遮蔽物を通過し、その外に現れるようにする。
- ②人が内に抱える「内容」が言葉等によって外に表され他者に知覚されるようにする。
- ③人の有する「気持ち」「感情」が態度・表情等によって外に表され他者に知覚されるようにする
- ④作者が内に抱える「内容」を文字によって物語に表さず、他者に知覚されないようにする。

以下順にその用法を見ていく。まず①について述べる。「雨・水・涙」といった自然物を目的語とする「漏らす」の用例はすでに『伊勢物語』に見え、他に『狭衣物語』にも見える。用例を以下の2、3に示す。両者とも歌の用例で2は「結ぶ」が「水」の縁語である「掬ぶ」の掛詞となっており、「縁を結ぶ」と「水をすくう（掬ぶ）」ことが掛けられている。「水を漏らさない」ということは比喩的に相手の女性との強い絆を保とうとする姿勢を表現している。また3も同様に「雨を漏らさない」ことが出家した女二宮との関係が続けることであることを比喩的に示している。

2 むかし、色好みなりける女、出でていにければ、
 などてかくあふごかたみにりにけん水もらさじと
 結びしものを 伊勢物語 28段

3 六月十日余り、いと暑き昼つ方、(狭衣は) 一條の宮にて、若宮具したてまつりて、端つ方に涼み給ふに、にはかにかき曇りて、村雨のおどろおどろしきに、柏木の木下風涼しう吹入りたれば、御簾少し上げて見出し給へるに、中に、柏木は、げにいたく漏り煩ふ。

柏木の葉守の神になどてわれ雨漏らさじと誓はざりけん。 狭衣物語

4 また、としこ、雨のふりける夜千兼を待ちけり。雨にやさはりけむ、来ざりけり。こぼれたる家にて、いといたく漏りけり。「あめのいたく降りしかば、え参らずなりにき。さる所にいかで物し給ひつる」と(千兼がいへりければ、としこ、

君をおもふひまなき宿とおもへどもこよひの雨はもらぬ間ぞなき 大和物語 67段

自動詞「漏る」には4に見える「雨が漏る」との用法がある。また3にも「漏らす」の使用されている直前に「漏る」が使用されている。4はとしこという女性が雨の降る夜、千兼という男性の訪れを待っていたが雨で支障が生じたのか千兼は来なかった。傷みの激しい家で雨がひどく漏った。「雨がひどく降ったので参ることができませんでした。そのような所にどのようにしていらっしゃいますか」と千兼が言って来たのでとしこは「あなたを思わない時はありません。すき間がない家とは思いますが、今夜の雨は漏ってこないところはありません」という歌を返すという例である。

このような自動詞「漏る」の用法の存在から「雨・水・涙」といった自然物を目的語とする「漏らす」の用例は用法上の自他対応を基盤とし自動詞「漏る」の「雨・涙」などを主語とする用法からの類推によって生まれたと推測される。しかし、「漏らす」のこのような用法は和歌の中で少数の例が見出せるにすぎず、その意味や用法も固定的で、使用に広がりは見出せない。このような「漏らす」の用法が使用上の広がりや欠く背景としてはそもそも「雨・涙」といった自然現象に関する自動詞「漏る」の用法を人為的に引き起こす他動詞的用法と捉えることがあまり自然ではないということが考えられる。

一方②の意味と解釈できる「人が内に抱える様々な内容」といった人に内在するものを目的語とする「漏らす」の用例は『宇津保物語』にすでに3例見られ、3例とも「自分の知っていること、思っていることなど内にある内容を外に出す」という意味で使用されている。用例を5に示す。同様の用法は『源氏物語』に多く見られる。6は夕顔の家を訪れた源氏があくる朝、夕顔をその屋敷近くの「なにがしの院」という人が住んでいない荒れた様子の屋敷に連れて行く。そこで屋敷を管理する預かりが源氏に御供がないのは不便があるだろうと伝えるのに対する源氏の言葉に現れた用例である。源氏は預かりに特別に人が来ないような隠れ家を求めたのだ。他の人に知らせるなど口止めをする。このような用法は『夜の寝覚』『狭衣物語』など他の作り物語でも多く見られる。

5 「天の下逆さまになるとも、かかることあらじと思へども、かけても、心魂騒ぎていとみじければなむ、え確かにもえ定めぬ。このこと人に漏らすな」とのたまひて、許させたまひつ。 宇津保物語 忠こそ

6 「殊更に、人来まじき隠れ家求めたるなり。更に、心よりほかに漏らすな」と、(源氏は) 口がためさせ給ふ。 源氏物語 夕顔

また③の意味と解釈できる「気色」「気配」といったこれも人に内在するものを目的語とする「漏らす」の用例は『源氏物語』から見られ、『源氏物語』より遅れて成立した資料にもしばしばみられる。以下の7、8、9に用例を示す。7は『源氏物語』における夕霧に語る朱雀院のことばの中の用例である。桐壺帝には源氏と冷泉帝の行く末を頼まれていたが、天皇になってからは立場上、限りがあり、朧月夜をめぐる事件の時にかばうことができず、源氏に恨まれてしまったこともあっただろうと思うのだが、長年その恨んでいる様子を源氏は見せないと言っている。8は『夜の寝覚』の例で、今では現世での望みを捨て、子どもたちの世話に明け暮れている寝覚上は、かつて愛した内大臣をかりそめの自分とは関係のない人と思ひ、心の内を見せて恨みに思ふ様子は決して見せないという例である。9は『栄花物語』の例で内裏での彰子と威子との対面の様子を評して高貴な人の関係は互いに適度な距離を置きつつ、なれなれしい態度を少しも表に出さないように気を遣い、女房達も用心しているとする例である。

7 「心置かれたてまつることもありけん」と思ふを、年頃、事にふれて、その恨み残したまへるけしきをなん、漏らし給はぬ。 源氏物語 若菜上

8 かりそめの、よその物に思ひはなち、うちとけてうらみ顔なる気色、ゆめにも洩らさず、 夜の寝覚 巻5
 9 よき人の御あはひは、恥ぢかはしうさせたまひて、つゆけはひも漏らさじとつつみ、女房なども心したり。

栄花物語 巻31 殿上の花見

②の用法では「人の持つ具体的な内容、情報」が「漏らす」対象であった。それに対し、③の用法では言葉では表現されない「気持ち」「感情」などが対象であり、それが人物の表情、振る舞い等に現れ、外から窺えるようになることが示されている。この二つの用法は人の内面にあるものが他者に知られるように外に現れる状態になるという点で共通性を有する。しかし、それが言葉によって表現されるか、されないかという点から用法上はっきりとした線引きが可能である。人に内在するある内容はそもそも他者が窺い知れぬものである。しかし「漏らす」という語はそれを他者の前にあらわにする、またはあらわになることを表現するものであると考えられる。その手段としては一般的に言葉、若しくは表情、態度からということが考えられる。したがって、人の内に抱えるものを「漏らす」際に「言葉」「気色・気配」が関係してくるのは当然であると考えられる。

④の意味は①②③とは正反対の意味であるように見える。10に用例を示す。源氏は夕霧の元服を行ったが、すぐに夕霧を四位にはせず、勉強をさせるため大学に入学させることにする。大学入学の際、行われた字をつける式の後、源氏は博士や詩文に堪能なもの、上達部、殿上人で出来るものをその場に残し、詩を作らせた。10の用例はその詩の出来栄えやその場にいた人々の様子を描写した部分である。終わりに作者の言葉を記したいいわゆる草子地の部分があり、女がよく知らないことを語るのは憎らしいことだと人が言い、嫌なことであるので「漏らした」、つまり、それ以上書かなかったと記されている。11、12に示した例も同様の用法であると判断される例である。

10「唐土にも、もて渡り伝へまほしげなる、世の文どもなり」となん、その頃、世に愛でゆすりける。おとゞの御をば、さらなり。親めき、あはれなる事さへすぐれたるを、涙おとして、誦しさわぎしかど、「女の、え知らぬことまねぶは、憎きことを」と、うたてあれば、漏らしつ。源氏物語 乙女

11この程の事、くぐらさしければ、例のもらしつ。源氏物語 夕顔

12くはしう言ひつゞけむに、ことごとしきさまなれば、漏らしてけるなめり。源氏物語 賢木

このような意味で用いられる「漏らす」はいわゆる草子地と呼ばれる部分にのみ現れ、作者を主語とし、前段を受けて、さらに描写するのは差支えがあるので、漏らしたとする形式になっているのが特徴である。中古の仮名散文におけるこの用法での使用例は『源氏物語』『狭衣物語』にしか見られない。以下の13に『狭衣物語』の用例を示す。このような「漏らす」の用法は『狭衣物語』の用例に3例見られるが、いずれも『源氏物語』の用例同様草子地で使用され、書き方も類似している。『狭衣物語』は『源氏物語』の影響を強く受けているとされる。このような「漏らす」の用法も『源氏物語』から受け継がれた可能性があると考えられる。

13その夜の事ども書き続けまほしけれど、中中なれば、漏らしつ。狭衣物語

次に意味①②③④の派生関係を考える。「漏らす」は自動詞「漏る」から派生したと考えられる。そのため自動詞「漏る」の用法が「漏らす」の用法の派生にも反映されたと見ることは穏当だろう。そこで意味①はまさに自動詞「漏る」の用法を他動詞として捉え直したものであると考える。それでは「漏らす」の意味②はどうか。このような場合、意味①のような具体的な意味から類推によって意味②③が派生したと考えることが多い。しかし「漏らす」については中古の仮名散文資料において意味①で使用された用例は少なく、その用法も固定的である。そこで意味②の派生の背景には意味①からの類推だけでなく、同時に「雨、水などの自然物が何らかの遮蔽物を通過してその外に現れる」という自動詞「漏る」の用法の重ね合わせがあると考えたい。「漏らす」の意味①が和歌の世界を背景として用いられるのに対し、意味②は具体的な日常生活の場面で使用される用法である。そのような場の違いを反映し、日常生活におけるそれぞれの内面の吐露という現象を表現するために「雨・水」から「内容」へという比喩的転用によって意味②が生まれたと考えたい。

意味③についても上記の捉え方は当てはまると考える。しかし、意味②と③はそれぞれ人に内在するものに関わる用法であることから意味③の派生には相互の用法の類推も働いているのではないかと考える。両者の出現時期を見ると「漏らす」の②の意味で使用される用例が『宇津保物語』に見られるのに対し、③の意味で使用される用例の出現時期は『源氏物語』からである。その出現時期については若干違いがあると見ることもできるがそれほど出現時期が異なるとも言えず、ほぼ同時期に存在していたと見るべきであろう。この二つの用法を比較すると意味②の方がより素朴かつ根源的なものであるのに対し、意味③はそれより繊細かつ文化的に高度な社会性・精神性を必要とするように思われる。そこで意味②③はほぼ同時期に生まれた蓋然性が高いと考えるが③の意味は中古における貴族社会という文化的背景のもとで対人関係における表現をより豊かにする目的で生まれた用法であると考えられる。

意味④は「人」を主語とし「内容」を対象とする用法である。そのため「漏らす」の①②③の意味の中では最も②と共通性があると考えられる。しかし両者の表わす内容は正反対である。そこで意味②と④に派生関係を想定し、両者の関係性を考えたい。両者を比較すると意味②も④も主体がその外に自分の持つ内容を出すということに変わりはない。しかし意味②では主語に限定がなく、対象を位置させる場も特定の人物というより漠然と主体の外部の人物と捉えられている。それに対し意味④では主語は作者に限定され、対象を位置させるべき場は物語の中に存在し、明確化されている。しかし、その位置させるべき場に対象を置かないのであるから、意味④は意味②とは異なり本来置くべ

き物語の外へ対象を出すということに主眼を置いた用法であると考えられる。見方を変えると意味②では主体内部が対象の移動する際の起点であるのに対し、意味④では物語の中の記述すべき場所が対象の移動する際の起点になっていると考えられるのである。

このように「漏らす」は「漏る」から派生したと考えられることから「漏らす」の複数の意味の派生に「漏らす」の意味用法間の類推だけでなく自動詞「漏る」の用法からの類推も関わっていると見られる。また西田の指摘するように自動詞「漏る」は当初和歌の発想から引き継がれたと考えられ、「漏らす」の意味①は仮名散文資料では和歌で使用された少数の例しか見出すことができない。より多くを占める用例は意味②③で使用された用例であるが、意味②と解釈される「漏らす」の用例は早くも『宇津保物語』に見られ、また意味③と解釈される用例は『源氏物語』にみられることから、その意味の派生は早い段階でなされていたことが窺える。つまり平安中期ころには「漏らす」の意味①②③④は成立していたが、意味①で使用された用例は和歌に集中し、散文では意味②③④で使用されたものがほとんどであるというように意味の違いに応じて用例が見られる文体に偏りがあるということになる。

なぜこのような現象が見られるのであろうか。この現象からは「漏る」「漏らす」の用法をめぐる和歌的世界と散文的世界の本質的な相違が透けて見える。意味①で使用された用例が和歌に集中するということは見方を変えれば和歌的世界にはこのような表現が多用される環境が存在するというを示す。逆に散文では和歌的世界を想起させる文脈を除けば、通常そのような表現は用いられることはないと考えられ、散文的世界にそのような環境は存在しないと捉えられる。その代わりに、散文的世界では意味②③で使用される用例が集中しており人間に内在する「人が抱える内容や気持ち」を目的語とする「漏らす」の用法が多用される環境が存在すると考えられる。であるから散文では「漏らす」の意味②が早い時期に生まれていたのである。

内に抱えている自分が体験したことや見聞きしたことや自分の気持ち、感じを内にとどめておくか、外に知らせるかということは日常生活において時に本人はもとより周囲にとっても重大な問題、関心事となる。またある内容、気持ちを内に秘めておく、あるいは吐露する、またそれを他人が知る、という場面をめぐって人々の内面にさまざまな葛藤が生み出され、交錯する。登場人物間の心理的葛藤は物語世界をより深く、豊かなものにする。「漏らす」の意味②や③が①とは異なり、作り物語を中心として発達しているのは物語世界が日常生活を舞台にしているということだけでなく、上述した和歌の文芸的世界より本質的に散文的世界のほうがそのような意味内容を多用する環境が備わっているためであろう。

さらに言えば『源氏物語』においては他の資料よりも「漏らす」が多用されているが、それは作者が物語作り「漏らす」を効果的に生かそうとしたためではないか

という見方もできる。また用例の分析から『夜の寝覚』『狭衣物語』など『源氏物語』の影響を受けて成立したとされる平安後期物語にもそれは受け継がれていると見ることができる。またこのことは「内容」「気色・気配」を主語とする用法が自動詞「漏る」に生まれるなど自動詞「漏る」の用法にも変化を与えたのである。

なお平安末期に成立した『今昔物語集』には「漏らす」の用例が1例見られ、この例における「漏らす」は「聞いた内容を外に出す」という仮名散文資料には見られない内容を表わしている。以下の14に例を示す。聖徳太子にはいくつかの名前があり、その名前の由来を一つずつ説明していく部分である。名前の1は厩戸の皇子、2は八耳の皇子で、八耳の皇子の名の由来は数人が一度に言うことをよく聞いて一言も漏らさず裁断したことによる。ここでは聖徳太子が人から聞いたことを一つも外に出さずに判断を下したことを示している。この用法は抽象的な内容を含んでおり中古に見られる④の意味と最も関連性が強いように見られるが同一ではない。聞いた内容を外に出さずに全て自分の中に入れるという点で後述する中世に見られる「漏らす」の意味⑥とも近いと考えられる。

14亦、太子ニ三ノ名在ス。一ハ厩戸ノ皇子、厩ノ戸ノ辺ニシテ生レ給レバ也。二ハ八耳ノ皇子、数人ノ一度ニ申ス事善ク聞テ一言モ不_レ漏_レ裁_レリ給ヘレバ也。

今昔物語集 巻第11 聖徳太子於此朝始弘仏法語第1

3.2中世における「漏らす」の意味用法

次に中世における「漏らす」の用法を見てみたい。中世における「漏らす」の用法を具体的に見ると、中古の「漏らす」において見られた意味①②③④のうち、①②④は中世の「漏らす」の用例にも認められた。そして、中世における用法の変化として新しく「人」「物」を対象とした用法が現れ、軍記物語で多用されていることが挙げられる。新しく中世において見られた意味を⑤⑥として以下に示す。

⑤敵である「人」を自分達の領域の外に出す。

⑥「物」を対象とする範囲の外に出す。

以下で用法ごとに記述していく。まず意味①について述べる。15は小野小町の不遇の晩年について語った部分の例で、小野小町は情がこわいという評判をとったためか、人の恨みの思いが積り積もったためか、風を防ぐこともできず、雨も漏らさないようにする手立てもないという例である。この例では「漏らす」が「雨が上から漏れてこないようにする」という意味で使用されており、中古から使用される意味①と同じであることが分る。

15されども心づよき名をやとりたりけん、はてには人の思ひのつもりとて、風をふせくたよりもなく、雨もも_らさぬわざもなし。 平家物語

16、17は意味②で使用された「漏らす」の例である。このような用法での用例は比較的多い。16は日吉大社の僧侶達の呪詛により、病にかかった後二条関白藤原師通の母が身をやつして日吉大社に参籠し、関白師通の病平癒の願を立てたところ、巫女に山王が乗り移り、祈願に対する神託を述べた。その祈願の内容は人に語っていなかったのでは誰かが他に話したということは考えられず、関白藤原師通の母はそれが山王の言葉だということを疑うことも無かったという例である。この例における「漏らす」は誰かが他人に話すことを表わしている。17は鎌倉幕府の執権北条高時が滅ぼされる場面で、北条高時は諏訪三郎盛高に命じて子の亀寿を信濃に逃がすことにした。盛高はそのことを高時の愛妾で亀寿の母である二位の御局に申して慰めようとも思ったが、二位の御局が人に知らせてしまうかもしれないと思い返して、あえて隠して自害を勧めるという例である。ここでも「漏らす」は高時の子の亀寿を逃がして命を助けることを他に知らせることを表わしている。

16母うへは御立願の事、人にもかたらせ給はねば、誰もらしつらむとすこしも疑ふ方もましまさず。

平家物語

17盛高この事ありのままに申して、御心をも慰め奉らばやとは思ひけれども、女性にははかなき者なれば、後にも、もし人に洩らし給ふ事もやと思ひ返して、涙の内に申しけるは、

太平記

また18は市中にあっても優れた人は自分の徳を隠して人に知られないようにするという例である。自分に備わるものを外に出さないという点では意味②の「自分の考えていること、知っていることを外に出す、現れるようにする」という用法に通じる。

18「大隠は朝市にあり」と云へる、則ち是也。かく云ふ心は、賢き人の世を背く習ひ、我が身は市の中にあれども其の徳を能くかくして人にももらさぬ也。山林に交はり、跡を暗ふするは、人の中に有りて徳をえかくさぬ人のふるまひなるべし。

発心集

19は中古において草子地に見られた意味④と判断される例である。19は作者の父が亡くなり服喪中であつたことと懐妊中であつたことから正月にいつも詣でていた神社に参ることができなかった。そこで門の外で祈念するとともに誓いを立てた。その後亡くなった父が夢に現れたが、その内容は別に記すのでここでは書かないという内容である。この意味での使用は少なく、調査した範囲ではこれ1例のみである。このような例が見られることについては『とはずがたり』の文体的性質も関係している可能性がある。

19春の初めには、いつしか参りつる神の社も、今年はかなはぬ事なれば、門の外まで参りて祈誓申つる心ざし

より、むば玉の面影は別に記し侍れば、これには洩らしぬとはずがたり

次に中古には見られなかった意味⑤の「人」を対象とする用法について述べる。この用法は打消しや禁止の文で使われることが多い。そして以下の例20～22のようにいずれも軍記物語で見られ、敵を逃がしてしまうことを表す。

20悪源太懸け向かひ、前後の勢をみまはして宣ひけるは、「侍どもこそ替りたれ、大將軍は未だかはらず。先にこそもらすとも、今度はあますな、もらすな兵ども。

平治物語

21ぱつとをしよせて、酒に酔ども一人ももらさず卅人ばかりからめて、六波羅へいて参り、前右大将宗盛卿のをはしける坪の内にぞひつすへたる。

平家物語

22これを見て、大手、搦手差し合はせて、「余すな、漏らすな」と追ひ懸けける間、逃げ方を失ひける敵ども、ここかしこに行き詰りて、自害をする者百余人、生け捕らるる者五十余人なり。

太平記

このような「漏らす」の用法は中世の軍記物語に多用される。しかし対象が「人」という具体的存在である点がそれ以前からある「漏らす」の用法とは異なっている。中世における「漏らす」にこのような用法が発生した要因を考えると、まず考えられるのは「液体」が遮蔽物を通して外に出てしまうというイメージが敵を討ち捕れず逃がしてしまうという現象に重ね合わせられているのではないかということである。これらの用法は合戦の最中の描写に多く見られる。対象となる兵士の数は一人、二人ではなく多数である。怒涛のように押し寄せ、また逃げていく集団に対し「波・水の流れ」のような液体のイメージを重ね合わせることは容易であろう。また、自分達の領域にとどめておくことに失敗し、相手方の武者たちを外に逃がしてしまうということには「涙」「内容」などが自分の側から外へ出てしまうという意味①や②等のイメージを重ねることも容易であろうと考える。いずれにしても「人」を対象とする「漏らす」の新しい用法は既存の「漏る」「漏らす」の意味に存在する液体のイメージを重ね合わせられた結果出現したと考える。

またそれに関連して中古から見られる自動詞四段活用「漏る」下二段活用「漏る」における「人」の変化を表す用法からの派生もこの新しい用法が出現した理由として挙げたい。「漏らす」に対する自動詞「漏る」には四段活用と下二段活用という活用の異なる二種がある。上代の「漏る」は四段活用のものしか見られないが、中古以降下二段活用の「漏る」が出現する。下二段活用「漏る」は中古において4例と用例が少ないため四段活用「漏る」より後から生まれた比較的新しい動詞であると考えられる。その下二段活用「漏る」の用例のうち『源氏物語』に見られる2例は「人」の位置変化を表すという用例で「雨」「涙」等を主体とする用法とは大きく異なっている。

以下の23、24に用例を示す。

23は頭中将が女性について語っている場面の用例で女性の中から一人を選ぼうとする時、必ず落とせないという人はめったにいないとする例である。24は同じく頭中将は右大臣家の四君と結婚しているが疎遠で、そのためか除目で官職が得られなかったとする例である。任官する人物に頭中将が入らなかったことが「漏る」と表現されている。これら『源氏物語』における2例のうち24は下二段活用「漏る」の用例であることが確かだが、23は終止形であり、四段活用、下二段活用いずれの「漏る」の用例か判然としない。しかしいずれも「人が何らかのリストから除かれる」ことを表す用法であると言える。

23そも、まことに、その方を取り出でん選びに、かならず漏るまじきは、いとかたしや。源氏物語 帯木
24(頭中将は)かの四君をも、なほ、かれがれにうち通ひつつ、めざましうもてなされたれば、(右大臣家では)心解けたる御聲の中にも、いれ給はず、「思ひ知れ」とにや、このたびの司召しにも、漏れぬれど、(頭中将は)いとしも、思ひいれず。源氏物語 賢木

また『今昔物語集』にも同様の用法による「漏る」の用例が2例見られる。以下の25、26に用例を示す。これらについてもいずれも終止形の用例であるため活用の種類が判然としない。しかし共通して自分が仏、観音の利益を受ける対象から除かれるべきではないということを表わしている。つまり、これらにおける「漏る」も23、24同様「人」があるリストから除かれる事を表す用法であると言える。

25盲女、仏ニ向ヒ奉テ礼拝シテ、白シテ言サク、「我レ、伝へ聞ク、『薬師ハ、一度ビ御名ヲ聞ク人諸ノ病ヲ除ク]。我レ一人、其ノ誓ヒニ可漏ベキニ非ズ。

今昔物語集 卷12薬師仏従身出葉与盲女語 第19
26「長谷ノ観音コソ難有キ人ノ願ヲバ満テ給フナレ。我ノミ其ノ利益ニ可漏キニ非ズ」ト深ク信ジテ、京ヨリ、不階ノ身ナレドモ、只独り歩ヨリ長谷ニ参ニケリ。

今昔物語集 卷16仕長谷観音貧男、得金死人語 第29

このように中古における自動詞四段活用「漏る」、下二段活用「漏る」には「リストから除かれる」という「人」の変化を表す用法が少数ながら見られる。そしてこの用法は中世になると特に下二段活用「漏る」の用例が多くの資料で見られるようになる。筆者が調査した範囲では19例と比較的多くの用例が確認できた。以下27、28に『平家物語』における用例を2つ示す。

27は鬼界ヶ島に流された藤原成経、平康頼、俊寛の三人のうち藤原成経、平康頼は赦免され、帰京することになったが、俊寛だけは赦免されず、島に残ることになった。嘆く俊寛に対し、宥める少将藤原成経の言葉に含まれる例である。成経は俊寛に命は大切なので今回は赦免から除かれてしまったが、最後まで赦免がかなわないと

いうことがあろうかと語る。ここでの「漏る」は「赦免される人々から外れる」ことを表している。28は中宮(後の建礼門院)に御産の兆しが見えたという場面の例である。そのことを聞き付け、後白河法皇もお越しになり、関白、太政大臣以下の公卿、殿上人のうち世に知られ、官位の昇進に望みをかけ、官職を持つほどの人は全て訪れたとする例である。ここでも「漏る」は「中宮のもとを訪れる人々から外れる」ことを表している。

27何としても、命は大切な事なれば、今度こそもれさせ給ふ共、つるにはなどか赦免なうて候べき」と、なぐさめためへ共、人目も知らず泣きもだえけり。

平家物語

28関白殿を始め奉りて、太政大臣以下の公卿・殿上人、すべて世に人とかぞへられ、官加階にのぞみをかけ、所帯所職を帯する程の人の、一人ももるるはなかりけり。

平家物語

また29に示したものは『保元物語』における用例で、保元の乱後に関白藤原忠通が出した、今後朝廷に背かない旨の起請文中に見られる例である。この例ではもし野心を差しはさんだならば神仏の罰を受け、今後、三世にわたって神仏の利益を受けないと誓っている。これも終止形であるため、活用の種類は判然としないが25、26に示した『今昔物語集』の例と同じく自分自身が利益を受ける対象から外れることを表わす用法である。なお坂詰力治・見野久幸編(1981)『保元物語総索引』笠間書院ではこの「漏る」を四段活用の用例としている。

29其御書には、起請の詞を載せられたりけるとかや。「朝家の御為、野心をさしはさまば、現世には天神地祇の冥罰を蒙り、当来には三世の諸仏の利益にもるべし。」とあそばされたりける。

保元物語

中古の「漏らす」には「人」を対象とする用法はなく、中世の多くの軍記物語で見られる「人」を対象とする「漏らす」の用法は「漏らす」の用例のみを見る限りでは突然出現したような印象を持つ。しかし、自動詞「漏る」には中古、中世に「人」を主語とし「それがリストから外れる」とする用法がある。「漏る」「漏らす」は自他対応をなしているためこれまでも述べたように歴史上用法の面で何らかの影響を及ぼし合っていると考えるのは自然である。そこで、中世から見られる他動詞「漏らす」における「対象を逃がす」という用法は自動詞「漏る」の「人がリストから外れる」との用法から自他対応を基盤として生まれたとも考えられるのである。

以上中世の軍記物語において見られる「漏らす」の意味⑤の派生の要因について考察してきた。その要因として「漏らす」の既存の用法に見られる「液体」が遮蔽物を通して外に出てしまうというイメージが敵を討ち捕れず逃がしてしまうという現象に重ね合わせられているという可能性、および「漏る」「漏らす」の自他対応を基

盤として中古、中世の自動詞「漏る」に存在する「人がリストから外れる」とする用法から生まれたという可能性の二つを挙げた。しかし、実際にはこれらのどちらか一方に決めるべきことではなく、二者が意味⑤の派生に関係し合っていると見るのが妥当であろう。

次に用例を示し、「物」を対象とした意味⑥について述べる。30は『曾我物語』の例で挿入された仏教説話に含まれる例である。仏性国に血の雨が降り、御門が博士に尋ねたところ、今夜不思議の子どもを産むものがある、探し出してその子を遠くの島に捨てたほうが良いと言われた。遠くの島に捨てられた子供が成人すると鬼の姿になり、島に来るものを食べるようになった。この後、罪人を此の島に送ったところこれも取って食べたとする記述が続くため、示した例における「物」とは生き物であり、人も含む可能性があるが、主に動物を指していると考えられる。そしてここでの「漏らす」は対象を「ある範囲から除く」ということを表わしている。

31は『太平記』の例で新田義貞の遺児新田義興を討つために竹沢右京亮が味方になると偽り、献上品を持ち、近づいてくるという場面の例である。竹沢右京亮は義興だけでなく義興の兵達にも酒を勧め、馬・物具・衣裳・太刀・刀などを献上したということである。ここでも「漏らす」は対象を「ある範囲から除く」ということを表わしていると考えられる。

30これ、不思議の者として、官人に仰付て、遠嶋にすてけり。

然に此人蟒、漸成人する程に、たけき鬼の姿に也けり。
此嶋に来物をばもらさずくらふ。 曾我物語

31これのみならず越後より付き纏ひ奉って、ここかしこに隠れ居たる兵どもに、皆一献を進め、馬・物具・衣裳・太刀・刀に至るまで用々に従って洩らさず、これを引きける間 太平記

これらの用法では意味⑤と同じく打消の助動詞を伴って使用されることが多い。意味内容は意味⑤と類似している。また前述したように平安時代末期成立の『今昔物語集』では「聞いた内容を一つも漏らさず」という意味で使用された用例も見られることから、意味④や⑤からの類推によって派生した蓋然性が高いと考える。

4. 複合動詞「～漏らす」の形成と意味関係の変容

4.1 中古における「～漏らす」の意味関係

次に「～漏らす」の形成と意味関係の変化、そしてその背景を明らかにする。まず中古における「～漏らす」を見てみたい。「～漏らす」という形式は中古の『源氏物語』に「言ひ漏らす」「書き漏らす」「聞き漏らす」の用例が確認され、調査し得る仮名書き散文資料の範囲ではこれらの用例が「～漏らす」の初出のようである。「～漏らす」は生産性が低く、同時代の仮名書き散文資料では他に『紫式部日記』に「ご覧じも漏らす」が見られるの

みである。現代語における複合動詞は形態的に一語化しているため助詞などの統語的要素が介入することはないが、中古語では形態的緊密性が高くなかったため係助詞が介入することがある。「ご覧じも漏らす」は「ご覧じ漏らす」に係助詞「も」が介入した例と考え、分析対象に加える。

以下例 32～34に『源氏物語』における「言ひ漏らす」「書き漏らす」「聞き漏らす」の用例を示す。32は「言ひ漏らす」の例である。方違えて紀伊守の家を訪れた源氏が、邸内を眺めながらめぐっている侍女たちがひそひそと自分について噂話をしているのを聞くという場面である。源氏は藤壺のことばかりを思っている時だったので、自分と藤壺との関係がすでに周りに知られているかと思ひ、どきりとする。そして、このような時に自分たちのことを人が言っているのを聞いたらどうしたら良いだろうと思うのである。ここでの「言ひ漏らす」は「人が自分の知っていることを言い、それを外に出す」という意図的な行為を表わしていると考えられる。現代語における「言い漏らす」の表す内容は「言ったが一部言わないことがある」というものであるため、中古の用例の用法とは異なることが分る。また中古の用法では構成する動詞「言う」「漏らす」の意味がそれぞれ生きていると考えられる。

33は「書き漏らす」の例である。宇治八宮の逝去後、娘の大君、中君の心を慰めるため、薫も匂宮も折々にお便りをよこす。その内容について煩わしく、何でもないのでしょと作者が述べている部分である。この「書き漏らす」は現代語の用法と同じように見える。しかしこの例ではその前に「書き漏らし」たことの原因が述べられており意図的にその行為を行ったと理解できる。前述の通り中古の「漏らす」には「その内容をさらに描写するのは差支えがあるので、書くのをやめた」とする意味④が存在した。そこで後接する「漏らす」の用法はそのような意味④で使用された「漏らす」であろうと考える。すなわち、中古における「書き漏らす」は意味④の「漏らす」に「書く」という内容を加え、より詳しく表現したものであると考えられる。

34は秘密にされていた髭黒と玉鬘の交際について自然に人が興味深いこととして語り伝え、聞いた人がそれを周囲に広めているという例である。この例での「聞き漏らす」は「人が聞いて知覚した内容を外に出す」という意図的な行為を表わしていると考えられる。したがって現代語における「聞き漏らす」の「聞いたが一部、聞かなかったところがある」という用法とは異なっている。

32「かやうのついでにも、人の言ひもらさむを、聞きつけたらむ時」など、(源氏は)おほえ給ふ。

源氏物語 帚木

33中納言殿よりも、宮よりも、折過ぐさず、とぶらひ聞え給ふ。(その文は)うるさく、何となきこと多かるやうなれば、例の、書きもらしたるなめり。

源氏物語 権本

34かう忍び給ふ御中らひ（髭黒と玉鬢の関係）のことなれど、おのずから、人の、をかしきことに語り伝へつつ、次次に聞きもらしつつ、ありがたき世語りにぞ、ささめきける。源氏物語 眞木柱

また次の例35は『紫式部日記』における「ご覧じも漏らす」の例である。消息文の結びの体裁で綴られた部分で、自分でも読めないほど乱筆のところや脱字もごましましょう。そのあたりはまあお見逃しくださいという内容である。語義に即して解釈すると「読めない部分、文字を抜かしている部分は見ても内にとどめず、外に出してください」ということであり、「漏らす」の意味④と同じと捉えられる。

35え読み侍らぬところどころ、文字おとしぞ侍らん。それは、なにかは、御覧じも漏らさせ給へかし。

紫式部日記

以上、『源氏物語』における「言ひ漏らす」「書き漏らす」「聞き漏らす」、『紫式部日記』における「ご覧じも漏らす」の用法を見た。「言ひ漏らす」「書き漏らす」「聞き漏らす」には現代語にも同じ複合動詞が存在する。しかし、表わす内容を比較すると中古における「言ひ漏らす」「聞き漏らす」は「言うことでその内容を他人に知らせる」「聞いた後その内容を他人に知らせる」といった内容に解釈でき、現代日本語における用法と異なっている。この場合後接する「一漏らす」の意味は動詞「漏らす」の②の意味に対応すると考える。また「書き漏らす」は同じ意味内容を表わすように見えるが、中古の「漏らす」には「対象を書く内容から除く」という意味④があるため「書く」「漏らす」の構成する意味関係を「書くことが完全に履行されなかった」というような補文関係タイプとして捉えることはできない。「ご覧じも漏らす」についても「書き漏らす」と同様、「漏らす」は意味④と解釈される。したがって、中古における「～漏らす」はいずれも二つの動詞の意味がそのまま合わせられるにとどまっていると判断され、意味関係から見れば主題関係複合動詞と類似の意味関係を構成していたと考えられる。

中古における「～漏らす」は少ないもののいずれも言語活動および知覚を表わす基本動詞「言ふ」「書く」「聞く」「見る」と結び付いたものであった。このうち「言ひ漏らす」「聞き漏らす」については音声言語が関わっており、「書き漏らす」「御覧じも漏らす」については文字言語が関わっており、それぞれ発信と受信に用法が分れていることは興味深い。またこれらはいずれも紫式部を作者とする資料にのみ見られ、紫式部が創造した表現である可能性は排除できない。

中古においては他に『今昔物語集』に「囲み漏らす」の例が見られる。以下の36に示した例は源頼義が安陪貞任と争った前九年合戦の説話に見られる「囲み漏らす」の例である。源頼義は安陪貞任と戦をし、苦戦したが、なんとか敵を退けることができた。頼義の郎等、佐伯経

範は相模国の住人で頼義は経範を頼みにしていた。軍勢が敗れた時、経範は囲みから漏れ、脱出したが頼義の行方が分らなかった。この「囲み漏らす」は敵方が経範を囲んだが、討ち取ることが出来ず、逃したことを表し、囲みから外に出したことを「漏らす」という言葉で表現している。中世の軍記物語では「討ち漏らす」が多く見られるが、この「囲み漏らす」の用法に通じる。

36其ノ時ニ守ノ郎等散位佐伯ノ経範ハ相模国ノ人也。守専ニ此ヲ憑メリ。軍ノ破レケル時ニ、経範圍ミ漏サレテ、纔ニ出テ、守ノ行ケル方ヲ不知ラ。

今昔物語集 卷25 源頼義朝臣罰安陪貞任等語第13

4.2中世における「～漏らす」の意味関係

中世における「～漏らす」は本論での調査範囲では「討ち漏らす」が『平家物語』5例、『太平記』14例、『義経記』3例、計22例と最も多く、他は『徒然草』に「聞き漏らす」「記し漏らす」「見漏らす」が1例ずつ見られるのみであった。まず「討ち漏らす」であるが、中世では軍記物語に多用されている。敵を討とうとしたが、討てず逃したことを意味する。後接する「漏らす」は中世において見られる意味⑤の用法と同じである。以下に用例を示す。

37今井が兄樋口次郎兼光は、十郎藏人討たんとて、河内国長野の城へ越えたりけるが、そこにては討ち洩らしぬ。紀伊国名草にありと聞えしかば、やがてつづひて越えたりけるが、都にいくさありと聞て馳のぼる。

平家物語

38二階堂出羽入道は、吉野の城を責め落したるは専一の忠戦なれども、宮を打ち漏らし奉りぬれば、なほ安からず思ひて、やがて高野山へ推し寄せ、大塔に陣を取り、宮の御在所を

太平記

39相模八郎、同太郎は十九、伊北五郎は三十三にて斬られけり。討ち漏らされたる者ども、下りて鎌倉殿に参りて、「土佐は仕損じて、判官殿に斬られ参らせ候ひぬ」と申せば、

義経記

次に『徒然草』における「聞き漏らす」「記し漏らす」「見漏らす」について述べる。40に示したのは「聞き漏らす」の例である。これは世に知られている、過去の事件も「聞き漏らし」ている人もいるだろうから、はっきりと書いてやるのがどうして悪いことがあるかとする例である。この例を見ると作者が「聞く」ことをしたならば聞いた内容は全て聞き手の中に入っていることが望ましいという前提に立ち、しかし「聞き漏らす」人もいるだろうと述べていることが分る。それでは「聞き漏らす」は何を表わしているのかと言えば、それは「聞いたがその内容の全てをとどめておくことができず、一部は漏らした、すなわち抜け落ちた、忘れた」ということを表わしていると考えられる。

41は「記し漏らす」の例である。この例は『平家物語』

の作者について書かれた章段の例で、九郎判官、源義経のことは詳しく知って書いているが、蒲冠者、源範頼のことはよく知らなかったからか、多くの事を「記し漏らし」ているという内容である。これも本来作者は源範頼のことも含めた全ての内容を記すべきであるという前提に立ち、「記し漏らす」ことによってそのことが出来ていないことを表わしている。この場合の「記し漏らす」は「記したものの全てを記すことができず、一部の内容を漏らしている、すなわち抜け落ちていく」ことを表していると考えられる。またその前に「よく知らなかったためであろうか」という作者自身の推測が示されていることから、『徒然草』の作者は『平家物語』の作者によるその行為が意図的になされたのではないと判断していることも分る。

42の「見漏らす」の例は片田舎の人が賀茂神社の祭を見物する時には行列が来る前は奥の部屋で酒を飲んだり、物を食ったり、囲碁や双六などをして遊んでいるが、行列が来たときと知ると争って棧敷に上り、押し合いながら一つも「見漏らさ」ないように見つめているという例である。祭の行列を見るために片田舎の人達は待っているわけであるから、「見漏らす」は意図的な行為ではなく、「見たが内容の一部が抜け落ちた」ことを表わしていると考えられる。

40世に古りぬる事をも、おのづから聞きもらすあたりもあれば、覚束なからぬやうに告げやりたらん、悪しかるべきことかは。 徒然草234段

41九郎判官の事はくはしく知りて書きのせたり。蒲冠者の事は、よく知らざりけるにや、多くのことどもをしるしもらせり。 徒然草226段

42おのおの胆つぶるやうに争ひ走りのぼりて、落ちぬべきまで簾張り出でて、押しあひつつ、一事も見洩らさじとまぼりて、「とあり、かかり」と、ものごとくに言ひて、 徒然草137段

以上中世における「～漏らす」の用例を見た。「討ち漏らす」は中世において使用が広がった「漏らす」の新しい意味⑤をもとに、また36に示した『今昔物語集』に見られる「囲み漏らす」などからの類推とともに軍記物語において多用されたと考えられる。しかし『徒然草』において見られる「聞き漏らす」「記し漏らす」「見漏らす」は「討ち漏らす」とは別に中古の仮名散文表現の影響から使用された可能性がある。さて徒然草の「聞き漏らす」「記し漏らす」「見漏らす」で注目されるのは、これらが共通して意志性が無く、文脈から「～したがその一部が抜け落ちる」ことを表していることと判断されることである。

33、34、35に示した中古の『源氏物語』『紫式部日記』に見られる「聞き漏らす」「書き漏らす」「御覧じも漏らす」の用法と比較してみよう。中古の「聞き漏らす」の用法は「聞いた内容を人に話す」という意味であり、後接する「一漏らす」は「漏らす」の意味②で使用されていると判断された。また「書き漏らす」は「ある内容を書く

内容の外に出す。すなわち書かない」という意味であり、「御覧じも漏らす」は「見た内容を自分の外に出す。すなわち心にとどめない」という意味であった。したがって後接する「一漏らす」は「漏らす」の意味④で使用されていると判断された。またこれらは意志性を保っていると考えられる。しかし、中世の『徒然草』に見られる「聞き漏らす」「記し漏らす」「見漏らす」は意志性が失われ、「聞いたが、記したが、見たが、その一部が抜け落ちた」というような他者の行為の不完全さを表わす意味内容を構成している。したがって、時間の経過に伴い、「聞き漏らす」「記し漏らす」「見漏らす」における意味内容が変容していることが分る。なお「書く」と「記す」は類似の行為を表わすものとして同一視する。

その背景について考えてみよう。前述のように中世において「漏らす」の意味用法には変化が見られた。軍記物語を中心に「漏らす」が中古にはなかった意味⑤で使用されたということである。意味⑥に関しても対象は異なるものの表わす内容は「対象のある範囲から外に出す」ということからすると⑤とさほど変わらない。また意味⑤にもとづいて「討ち漏らす」という表現も生まれ、多数使用されている。これらの変化は軍記物語という特定のジャンルを中心に見られるものも戦乱の続く当時の時代背景を考えれば、「漏らす」「討ち漏らす」ともに人々にとって身近な内容を表わす表現であり、一般への浸透度は高いと考えられる。そして「討ち漏らす」の意味内容は「討とうとしたが、全てを討ち捕ることはできず、一部を漏らした、すなわち逃がした」と理解できることから、類推によって中古における「書き漏らす」「聞き漏らす」「見漏らす」の意味内容が「～したが一部が抜け落ちた」と再解釈されることになったのではないだろうか。

また中古においては動詞間の結合が形態的に語と言えらるほど緊密ではなく、複数の動詞を連接させた状態であったため「書いているがその一部の内容を除く」「聞いてその内容を人に伝える」「見たがその内容を自分の頭から除く」という意味内容を表わすために「書き漏らす」「聞き漏らす」「御覧じも漏らす」という表現を作ることが出来、それが許容された。その意味内容は「V1によって出現した状況、物が(を)V2」とでも言えるもので、主語や目的語の内容が若干違っているそのような意味内容も中古においては許容された。しかし少なくとも中世の『徒然草』の作者には「書き漏らす」「聞き漏らす」「見漏らす」をそのような意味内容を表わすものとして使用することは許容できなかったであろう。そのことが「討ち漏らす」の意味内容を「書き漏らす」「聞き漏らす」「見漏らす」の意味内容へ当てはめ、意味関係を統一的に解釈することにつながったと考えられる。

さらにジャパンナレッジの『新編日本古典文学全集』小学館のキーワード検索を用い、中世以降の「～漏らす」の用例を収集し、この問題を検討したい。「漏」「洩」「もらさ」「もらし」「もらす」「もらせ」の文字列について検索を行った結果、新たに『松浦宮物語』における「語

り漏らす」の例、『無名草子』における「書き漏らす」の例、『新古今和歌集』仮名序の「聞き漏らす」の例が収集できた。久保田淳編(2007)『岩波日本古典文学辞典』岩波書店によれば、『松浦宮物語』は1190～98年頃の成立かとされ、『無名草子』は1200～02年頃成立、『新古今和歌集』は1205年成立である。したがってこれらの資料はいずれも鎌倉時代初期の成立で、『源氏物語』と『徒然草』の間の時期に成立した作品であると言える。

43は『松浦宮物語』における「語り漏らす」の例である。主人公橋氏忠は成長した後、遣唐副使に任命され、唐に遣わされる。唐では皇帝の厚遇を受ける。ある時皇帝は病にかかり、次第に重くなった。しかし、氏忠を可愛がっていたので枕元に呼んで話をする。43は病の中で氏忠に告げた皇帝の言葉である。お前は危ないこともなく日本へ帰ることができるだろう。そう考える理由があつてこのことを知らせた、今見聞きすることを故国でいい加減に語り知らせることがあつてはならない、という例である。この場合の「語り漏らす」は「語ることで外に自分の知っている内容を出す」ということを表すと考えられる。

44は『無名草子』における法華經について記述された部分の例である。法華經の素晴らしさについて述べた後、どうして『源氏物語』のようなすばらしい作品に法華經の文字が見られないのだろうか。『源氏物語』が作り残し、書き漏らしたことがあつたらうか、これだけが一番の欠点であると思われると述べる。ここでの「書き漏らす」は反語表現の中で使用されている。『源氏物語』の作者が作り残したこと書き漏らしたことはないと強く述べる部分の前後に法華經の文字が『源氏物語』に見られないことが第一の難であると述べていることから『無名草子』の作者は「書き漏らす」行為を否定的に捉え、「本来書くべき内容から一部の内容を意図的にではないが落とした」と捉えていると考える。

45は『新古今和歌集』仮名序の例である。『新古今和歌集』以前に編まれた勅撰和歌集の撰者の数に触れ、古今和歌集では撰者が4人であり、『後撰和歌集』では撰者が5人であった。『拾遺』、『後拾遺』、『金葉』、『詞花』、『千載』などの和歌集は、みな撰者が一人であったことから良い歌を聞き漏らしたり、見落としたりしたところもあるだろう。そこで古今集、後撰集の前例を改めず5人の人を定めてしるし奉らせるのであると述べている。ここでの「聞き漏らす」もその行為を否定的に捉えられ、「聞いたであろうが一部は抜け落ちている」ということを表わしていると見られる。

43命あやぶみなくして、かならず本の国に帰るべし。思ふゆゑありて、このことをもらしつ。いま見聞くことを、本の国にしてあだに語りもらすことなかれ。

松浦宮物語

44など『源氏』とてさばかりめでたきものに、この經の文字の一偈一句おはせざるらむ。何事か、作り残し書き漏らしたること、一言もはべる。これのみなむ第一

の難とおぼゆる」と言ふなれば、無名草子45そののち、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載などの集は、皆一人これをうけたまはれるゆゑに、聞き漏らし、見及ばざるところもあるべし。よりて、古今、後撰の跡を改めず、五人のともがらを定めて、しるし奉らしむるなり。
新古今和歌集仮名序

これらの用例を見ると43に示した「語り漏らす」の意味内容は中古の「言ひ漏らす」と同じであるが、44、45に示した「書き漏らす」「聞き漏らす」における意味内容は中古における「書き漏らす」「聞き漏らす」とは異なり、『徒然草』の「記し漏らす」「聞き漏らす」と同じ意味で使われていることが確認できる。このことから「書き漏らす」「聞き漏らす」については少なくとも13世紀初めには現在と同じような意味で使用されていたことが明らかになった。「語り漏らす」が「書き漏らす」「聞き漏らす」と異なる意味内容を形成していることについては前接する動詞「語る」の意味が「漏らす」の意味②と重なるために補文関係としての解釈を阻害しているのだと考える。

このように中世の「～漏らす」において注目されるのは「書き漏らす」「聞き漏らす」「記し漏らす」「見漏らす」という現代語における「～漏らす」と同様の意味内容を表わすものが現れたということである。特に「書き漏らす」「聞き漏らす」「見漏らす」については中古との捉え方の違いが明確に現れている。中世における「書き漏らす」「聞き漏らす」「見漏らす」が中古とは異なり、現代日本語の語彙的複合動詞における補文関係とされる意味関係に近いと判断できる根拠として個々の用例から判断できる意味内容の他に全体の意味内容に意志性が失われていることを挙げたい。

柳田征司は柳田(2011)において意志動詞の無意志的用法が対応する無意志動詞がある意志動詞が存在していることを指摘している。このことはつまり有対他動詞には意志動詞の無意志的用法が見られることを示している。無対他動詞の場合、基本的には意志的な用法しかなく、「うっかり不注意で」「やむを得ず」のような修飾語を伴わないと無意志的用法は作れない。しかし、有対他動詞の場合は修飾語を伴わなくても無意志的用法を有する。また柳田は「財布を落とした」とだけ言った場合に、普通には無意志的用法と理解されるのは、意志的に財布を落とすということが事態として極めて稀であるということによる。何かわけがあつて、わざと落としたというような場合にしかこの文脈では意志的用法で用いることはできないと述べている。このことは逆に言うると意志的にその行為を行うということが事態として極めて稀である場合、その行為は無意志的用法と理解されるということになる。意志的にその行為を行うということが事態として極めて稀であるとはどういうことか。それはそのような行為が通常望まれないことであると理解される。すなわち有対他動詞における意志的用法と無意志的用法の区別にはその行為に対する社会通念上の望ましさが関係

していると考えられる。

その上で中世の「書き漏らす」「聞き漏らす」「記し漏らす」「見漏らす」の用例を見ると、どれも前述のようにそのような行為が本来あるべきではないと否定的に捉えられていたと判断される。「漏らす」は有対他動詞であるため「～漏らす」が望まれない行為であると捉えられていたということからもその意味内容が無意志的なものであったとの判断が補強される。一方中古の「書き漏らす」「聞き漏らす」「見漏らす」の意味内容は意志的な行為を表わしていたと考えられ、それに対応する「漏らす」の意味②および④も意志的な行為を表わしていると考えられる。したがって中世の「書き漏らす」「聞き漏らす」「記し漏らす」「見漏らす」の全体の意味内容からは中古とは異なり、その中に動詞「漏らす」の意味②および④がそのまま反映されているとは考えられないのである。

4.3近世における「～漏らす」の意味関係

次に近世における「～漏らす」の意味関係について述べる。用例収集には前述のジャパンナレッジの『新編日本古典文学全集』小学館のキーワード検索に加え、国文学研究資料館の大系本文（日本古典文学）データベースの全文検索も使用した。大系本文（日本古典文学）データベースの全文検索についても「漏」「洩」「もらさ」「もらし」「もらす」「もらせ」の文字列について検索を行った。検索を行った結果、「討ち漏らす」「言ひ漏らす」「書き漏らす」「聞き漏らす」「見漏らす」「考へ漏らす」「拾ひ漏らす」「積み漏らす」の用例が得られた。全体的に用例数は少ないがその中でも「討ち漏らす」の用例は多数見られた。合戦等の限定的な場面で使用する表現として普及していたと考える。その他「書き漏らす」「聞き漏らす」も比較的用例が多い。しかしそれ以外は全て1例しか用例が得られなかった。以下具体的に用例を見ていこう。

まず「討ち漏らす」について見ていく。46、47に用例を示した。46は歌舞伎狂言の『傾城壬生大念仏』（1702年上演）に見られる例、47は浄瑠璃『平家女護島』（1719年初演）に見られる例である。これらはいずれも近松門左衛門作である。用例を分析した結果、「討ち漏らす」は「相手を討とうとしたが、果たせず逃がした」という内容を表わすと考えられる。いずれも軍記物語を下敷きにした作品、武家の世界を舞台とした作品に見られ、中世の用法と同じであった。他に『仮名手本忠臣蔵』（1748年初演）『椿説弓張月』（1807～11年刊）などにも用例が見られた。

46新太郎は奥へ切入、民弥・姫君を連れ立出れば、彦六見て、「悪人共は何とした。」

「されば、兩人ながら壁を越へ逃げた。討ち洩らして無念な。家中残らず悪人へ一味したぞ。」

彦六聞、「よいよい。逃げば逃がせ。重ねて討つ時節

があらふ。」

傾城壬生大念仏（日本古典文学大系 岩波書店）
47人々はつと驚けば、宗清につこと打ち笑ひ、ハハア誰かは知らず、我を突きしは源氏の忠臣。サア宗清こそ牛若に出で合ひ、深手を負うて討ちもらした。ヤレ退けヤレ退けと呼ばはる隙に。

平家女護島（新編日本古典文学全集 小学館）

次に「言ひ漏らす」の例を見たい。「言ひ漏らす」の例は1例のみ収集することが出来た。以下の48に示す。48は『椿説弓張月』の例で、源為朝が生き別れた妻白縫姫らと再会し、別れてからの経緯を語り合う場面の例である。白縫姫は行き別れてから起こったことの全てを語るが、従者の紀平治がその後白縫姫の「言ひ漏らした」ことを語る。白縫姫が言ったことと同じことを再度紀平治が語っても意味はない。したがってここで使用されている「言ひ漏らす」は現在と同じ意味で「言ったけれども、一部は言わなかった」ということを表わしていると考えられる。『椿説弓張月』は1807～11年刊である。少なくともこのころには「言ひ漏らす」に現代と同じ用法が確認できるということになる。なお『日本国語大辞典 第2版』小学館ではこの意味での「言ひ漏らす」の例として坪内逍遙『小説神髓』（1885～86年刊）の例を挙げている。『椿説弓張月』の例はそれより80年ほど早い時期の例と言える。

48かかりけるに、御曹司（源為朝）、はからずも今宵来ませし事、夢の告に違はず。かく環会奉るにこそ、こは併新院の宣ひしらし給ひし事さへ、思ひあはされ侍れ」とて、（白縫姫は）十年にあまる憂事のいふしじうを告給へば、紀平治はあまりの歎しさに、不覚に落涙し、白縫姫のいひ漏らし給へるを、是彼語り慰れば、高間太郎は磯萩とともに、広縁に拝伏し、

椿説弓張月（日本古典文学大系 岩波書店）

次に「書き漏らす」について見る。以下49、50、51に「書き漏らす」の例を示す。49は『男色大鑑』（1687年刊）に見られる「書き漏らす」の例である。この例では男色の様々な姿をこの大鑑に書き漏らすことのないように難波の浅入り江の海藻のようにかき集めたと述べている。また50は『椿説弓張月』の例で為義からの使いで為朝のもとに来た家臣の景延が為朝の家臣紀平治と急いで為義の所に戻り、直に会い、景延は為朝の手紙を見せ、紀平治は為朝が手紙に書いていないところを詳しく述べたという内容である。51は『歌学提要』（1849年刊）の例である。この例は『歌学提要』の後書きに含まれている例でこの書物は初めに述べたように内山真弓が師である香川景樹の説を抜き出して綴ったものである。書き漏らしたのものも多いだろうが、と述べている。内容から分るようにこれら49、50、51に見られる「書き漏らす」は「書くべき内容の一部が抜け落ちている」と言うべき内容で

あり、中世に出現した「書き漏らす」や現代語における「書き漏らす」と同じ意味内容であると言える。

49ただ遊興は男色ぞかし。さまぎまの姿をうつし、この大鑑に書きもらさじと、難波浅江の藻塩草、片葉の蘆のかた耳に、これみな聞きながしの世や。

男色大鑑（新編日本古典文学全集 小学館）

50さる程に景延紀平治は、只管路を急ぎ未だ幾日もあらぬに帰りのぼり、直に為義朝臣に見えまゐらせ、景延まづ為朝の書呈を献れば、紀平治は為朝の書もらし給へる所を、審に演説せり。

椿説弓張月（日本古典文学大系 岩波書店）

51この書ははじめにいへるごとく、社友内山真弓が、師の説をぬきいでてつゞり侍りし也。書もらせしふしも多かめるを、

歌学提要（日本古典文学大系 岩波書店）

また「聞き漏らす」についても見てみよう。以下に例を示す。52は仮名草子『たきつけ草・もえくゝ・けしずみ』（1677年刊）の例である。この仮名草子は『たきつけ草』『もえくゝ』『けしずみ』の3巻から成る遊女評判記であり、この例は『たきつけ草』冒頭に見られる例である。『たきつけ草』は遊郭から帰る若者と老人の会話を作者が後をつけて聞き書きしたという体裁が取られている。ここで作者と思しき人物は聞えてくる二人の会話を興味深く感じ、後から付いて行き、内容が分るほど二人の会話を聞いている。しかし、この後二人から離れると「聞き漏らし」でしまうと捉えている。二人から離れば会話の内容はそれ以上分からなくなるのであるから、この場合の「聞き漏らす」は「二人の会話内容の一部を聞かない」という意味内容になると考えられる。

52何事ならん、つぶつぶとつぶめき、ところどころうちうなづき、ほほゑみたる声音の、はづれはづれ聞こゆるも、あながちにゆかしくて後に立ちて追ひ行けば、かの方よりの帰るさの物語りどもになむありける。なをも聞きもらしがたくて、苧屑頭巾をかたぶけ、うち連れて耳をそばだつるに たきつけ草・もえくゝ・けしずみ（新編日本古典文学全集 小学館）

53は近松門左衛門の時代浄瑠璃『曾我会稽山』（1718初演）の例である。二宮は範頼の切腹と曾我兄弟の巻狩での敵討の計画を八つまでに頼朝に注進するよう命令を受けた。敵方は九つの時刻に八つの鐘を撞かせ、二宮が務めを果たせなくなるよう画策した。この例は八つの鐘を聞いた二宮が九つの鐘を聞いていなかったと嘆く場面の例である。ここでの「聞き漏らす」は「聞いたが聞いていない」という意味を表わしていると考えられる。二宮が八つの鐘を聞いたのは実際には九つの時刻である。したがって、その鐘の前に九つの鐘を開けるはずはない。しかし、そのことを知らない二宮は偽の八つの鐘の音を基

に現時点が八つであると推論し、したがって九つの鐘も既に鳴ったはずであるから自分は九つの鐘を「聞き漏らし」たのだと判断するのである。この例は実際には起こっていない現象を論理的推論から起こったものと結論付け、結果を基に「聞き漏らす」が使用されたという例である。鐘の音を実際には聞いていないのだが、聞いたであろうと二宮は考えているからこそここで「聞き漏らす」を使用しているということになる。

53一声驚く鐘の声、二の宮はつと指折って、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ。南無三宝、はや八つか、九つの鐘を何としてか聞き洩らせる。

曾我会稽山（新編日本古典文学全集 小学館）

54なう嫁達、乗つてさへくたびれる我が身で思ひやらるる、もう何時ぞ。心のわくせきするゆゑか、鐘は四つやら、夜中やら、聞き捨てて数へもせず、ふけたやうに覚ゆるに、狩場の方に物音は聞えずや。

曾我会稽山（新編日本古典文学全集 小学館）

また同じ『曾我会稽山』に鐘の音を聞くということに関する54の用例が見られる。54は曾我兄弟が狩場へ敵討に向かった後、兄弟の老母と二人の嫁が事の次第を確かめに向かうという場面の例である。この例は老母が嫁に語りかける言葉で老母はもう何時かと嫁に聞き、心が落ち着かぬせいか鐘が四つか夜中の九つか数えもしなかったと話している。ここで「聞き捨てる」という言葉が使用されていることに注目したい。この状況での母親の心中は敵討が成功するか、息子の命がどうなるかという心配事で占められていると考えられる。したがって、鐘が鳴ったか、何回鐘が鳴ったかを把握している余裕はない。だから数えもしなかったというわけだが、鐘の音については数えないだけではなく、「聞き捨てる」と表現している。この表現は強い意志性を感じさせ、鐘の音はおそらく知覚されるわけであるからその意味では聞くことになるが、しかし、その音は捨てて数えもしなかったということになる。このような「聞き捨てる」は意志性を感じさせ、それと比較すると「聞き漏らす」には意志性がないと考えられる。

55は仮名草子『一休ばなし』（1668年刊）に見られる「見漏らす」の用例である。『一休ばなし』は一休宗純の逸話、俗伝等を収録した仮名草子で、この用例は「一休魚をくひて高札を立給ふ事」という話に見られる。「一休和尚は生き仏のような方で魚を召し上がって水中に出されるとその魚はすぐに生き返ってもとのように泳ぐ」といううわさが京の町で持ちきりになっていますと人から聞いた一休和尚が面白く思って高札を立てた。高札に書かれた内容は来たる某月某日大徳寺において魚を食べ、そのままとの生きた魚に吐き出し、水中を泳がしてご覧にいれよう。御望みの方々が御見物に来られるのをお待ち申すというものであった。その高札によって多くの人々がその日に集まってきたという例である。群衆は一休のすることの一部始終を見ようと集まっている。それを見

漏らさじ」と表現しているところから「見漏らす」の意味は「見たが内容の一部を見ない」ということになろう。

55 しろもしらぬも、みたも見ぬも、其日の来るを待かねて、門前に市をなし、我見もらさじと、ころぶまでのびあがりて、洛中の貴賤くんじゆせり。

一休ばなし（新編日本古典文学全集 小学館）

56は「考へ漏らす」の用例である。この例では契沖の歌学、歌道研究を古今独歩と評価した前段に続き、最近契沖に張り合ってさらに深く古書を考へ、契沖が考へ漏らしたところを考える人もあると聞かすが、という内容が述べられる。ここでの「考へ漏らしたる処」というのは契沖が「考えたものの抜け落ちた部分」ということであり、「考へ漏らす」は契沖が「考えたが抜け落ちた」という意味であると考えられる。57は狩場へ敵討に向かった曾我兄弟を追いかける老母と二人の嫁の道行の部分に見られる用例である。ここでは「拾ひ漏らす」の例が見られるが、「拾ひ漏らす」の目的語は「種」であり、その意味内容は「拾ったが抜け落ちた」ということを表わしていると考えられる。

56 さて又近頃契沖をもどきてなほ深く古書を考へ、契沖の考へ漏らしたる処をも考ふる人も聞こゆれども、それは力を用ゆれば、誰もあることなり。

排蘆小船（新編日本古典文学全集 小学館）

57 懺悔、懺悔、懺悔、懺悔え、色に染み、また、香に愛でて、拾ひ洩らせる後世の種、闇の闇路を、いかにせん。

曾我会稽山（新編日本古典文学全集 小学館）

以上から近世は「～漏らす」の意味関係を補文関係と解釈することが進行した時代であると言える。そしてその進行は前接する動詞により、遅速があり、「書く」「聞く」「見る」は早く、「言ふ」はそれより遅い。

おわりに

本論では中古、中世における動詞「漏らす」の意味とその変化を明らかにし、それを基に「～漏らす」の発生と歴史的展開を明らかにした。語彙的複合動詞「～漏らす」は中古においては文脈を支えとしつつそれぞれの動詞の意味を合わせたような意味関係を構成しており、影山の用語で言えば主題関係複合動詞に近い存在であったと捉えられる。しかし中世になると「書き漏らす」「聞き漏らす」「見漏らす」等に現代語の語彙的複合動詞で言えばいわゆる補文関係と見られる意味関係が認められるようになる。この意味関係を有する複合動詞は他に「言ひ漏らす」「考へ漏らす」「拾ひ漏らす」も確認でき近世にかけて若干の広がりが見られた。

中世以降「～漏らす」において補文関係と見られる意味関係が発生した背景として中古末から「漏らさず」「漏らすな」という固定的な形式を伴って新しく「人を逃す」

「物を除く」といった意味を表わす「漏らす」が使用されるようになったこと。「敵を討とうとしたが逃した」という内容を表わす「討ち漏らす」が新しく生まれたことなどが挙げられる。中古で作られていた「書き漏らす」「聞き漏らす」「見漏らす」の意味内容は中世において許容されないものであったところから新しく生まれていた「討ち漏らす」の意味関係を「書き漏らす」「聞き漏らす」「見漏らす」に当てはめ、統一的に意味関係を捉えられるようにしたものと考えられる。「～漏らす」における補文関係の発生は「書く」「聞く」「見る」が前接するものが早く、「言ふ」が前接するものはそれより遅れるというように結び付く動詞によって遅速が見られた。これについては「言ふ」「漏らす」の意味が類似していることが意味関係の再解釈を妨げたものと考えられる。以上のことは同じ表現が当初の意味関係が許容されず、後の時代においてその意味関係が異なる内容に再解釈され用法が変容することを明確に示している。

以下58、59、60に現代語における「書き漏らす」「聞き漏らす」「言い漏らす」の用例を示した。これらの前項はいずれも動作動詞である。動作動詞は結果を含意せず純粹に行為のみを表わすことができるため素朴な言語感覚からはこれらの意味関係を「書いた、聞いた、言った、しかし、その内容の一部を漏らした（抜け落ちた）」というように捉えられる。

58 指示を受けるときにメモを取る場合、これだけは書き漏らしてはならない項目が二つあります。それが「いつまでに」と「どんなことができているのか」ということ。

サカタカツミ『こんなことは誰でも知っている！会社のオキテ』翔泳社

59 冗長度というと、なにか非常にムダなもののように思うかもしれないが、そうではない。じつは冗長度が大きいおかげで、私たちは相手からきたメッセージを多少聞き漏らしても、ほぼ正確にその中身を理解できるのだ。

唐津一『ビジネス難問の解き方 壁を突破する思考』PHP新書

60 「そうですね。では、ちよいと一杯やりましょうか。東海道では、先日言い漏らしたおもしろい話がまだまだありましてね」

永井義男『鬼武迷惑剣仮宅雀 江戸色里草紙』学研M文庫

しかし、内容を全て書くことが「書く」なのであり、1%でも内容が欠ければ「書く」ことにはならないと捉えることもできるだろう。そのような捉え方に基づけば「書き漏らす」を「書くことが（完全には）できない」と捉えることが出来る。「書く」は動作動詞であるが、行為の結果としての内容を生み出す動詞でもある。そのような性質に基づけば上記のように捉えることもできる。このような捉え方が補文関係としての捉え方なの

ではないか。同様に「聞き漏らす」「言い漏らす」も「聞くことが(完全には)できない」「言うことが(完全には)できない」ということになる。以下に58、59、60における「書き漏らす」「聞き漏らす」「言い漏らす」を「書くことが出来ない」「聞くことが出来ない」「言うことが出来ない」で置き換えた用例を示した。置き換え前の用例と比較してその内容はほぼ同じであると捉えられる。

58′ 指示を受けるときにメモを取る場合、これだけは書くことができなくてはならない項目が二つあります。それが「いつまでに」と「どんなことができていればいいのか」ということ。

サカタカツミ『こんなことは誰でも知っている！
会社のオキテ』翔泳社

59′ 冗長度という、なにか非常にムダなもののように思うかもしれないが、そうではない。じつは冗長度が大きいおかげで、私たちは相手からきたメッセージを多少聞くことが出来なくても、ほぼ正確にその中身を理解できるのだ。

唐津一『ビジネス難問の解き方 壁を突破する思考』PHP新書

60′ 「そうですね。では、ちょっと一杯やりましょうか。東海道では、先日言うことが出来なかったおもしろい話がまだまだありましてね」

永井義男『鬼武迷惑剣仮宅雀 江戸色里草紙』学研M文庫

「書き漏らす」「聞き漏らす」「言い漏らす」における素朴な言語感覚から捉えた意味関係と補文関係として捉えた意味関係について述べた。これらの場合、感性的には「～したが、その内容の一部が抜け落ちた」という意味関係のほうが理解しやすい。しかし、論理的には補文関係として捉えることができる。そもそも語彙的複合動詞における補文関係という意味関係は意味関係が不透明な語彙的複合動詞に対して統語的複合動詞に存在する補文関係を当てはめたものである。そして、その意味関係が不透明であるということは歴史的に生じたと見て良い。

そのことからすれば素朴な言語感覚から捉えた意味関係はむしろ意識的にはないだろうが「漏らす」の意味の歴史的な広がりを踏まえた解釈の仕方であると考えられる。そして補文関係として捉えた意味関係は個々の複合動詞の意味内容をV1の引き起こす事象がどうであるのかという観点から論理的に作り上げたものであると言える。長々と書き連ねたが筆者が問題だと思えることは中世において使用されていた「書き漏らす」「聞き漏らす」「見漏らす」は「～したが、その内容の一部が抜け落ちた」という素朴な言語感覚から生まれた意味関係と捉えられていたのか、「～したことが不完全に終わった」というような補文関係と捉えられていたのかということである。この問題は非常に難しい問題であり今後の課題としたい。

また「書き漏らす」「聞き漏らす」「言い漏らす」の意味関係には手段、様態、原因、並列の意味関係とは異なる特徴があることも意味関係の分析を困難にしている。通常現代語における複合動詞では全体の主語・目的語が前項、後項の主語・目的語と一致する。しかし「書き漏らす」において前項「書く」の目的語は過不足のない「100%の内容」であるが、後項「漏らす」の目的語は「100%の内容」ではない。「漏らす」の目的語を仮に想定すれば「その内容の一部」というものになる。このことは「聞き漏らす」「言い漏らす」についても同様であると考えられる。関連するがこれらの複合動詞においては前項の動作が期待される動作を完全には達成しておらず、逆接的な意味関係を形成している。以上の特徴は他の複合動詞にはあまり見られないものであり、手段、様態、原因、並列の意味関係と分類できないことに関わっているのではないかと考える。

また中古における「～漏らす」の意味関係をあえて「V1によって出現した状況、物が(を)V2」とした。このような意味関係は現在では新たに形成することはできないが、過去には許容された。特に中古では複合動詞の形態的なまとまりが緩いこともあり、生産的であったと考えられる。そのような意味関係が許容される時代に生まれた複合動詞が消滅せず使用され続けることで後代補文関係と解釈される複合動詞が生まれていると考えられる。副詞的關係とされる複合動詞にも同様のことが言えるかもしれない。補文関係、副詞的關係とされてきた複合動詞は影山(2013)ではアスペクト複合動詞と分類される。影山(2013)には語彙的アスペクトを示すV2の特徴を以下のようにまとめているが、これらには歴史的変遷によって生じたものが多く含まれていることは示唆的である。

- a. V2は、V1の概念的意味に対して何らかの語彙的アスペクトの意味を添加する。
[例]「空が晴れ渡る」は「空が渡る」ではなく、「空が晴れる」という事象が「すべての空間に及ぶ」つまり「すみずみまで晴れる」という意味。
- b. V2は、単独で用いられたときの動詞と意味が異なる。
[例] 呆れ果てる、晴れ渡る、思い過ごす、待ちわびる、褒めちぎる
- c. V2は、限られたV1としか結び付かない。(その点で、統語的な補助動詞が自由度が高いことと対照的。)
- d. V2は、現代日本語では単独で使われないものがある。
[例] 降りしきる、決めあぐねる、言いふらす、着古す、呼び習わす、黙りこくる、眠りこける
- e. V2は、動詞としての活用パラダイムが不完全なものがある。
[例] 興奮がさめやらぬ間に、待ちきれない(*待ちきれる)
- f. V1とV2の意味解釈が単純ではないため、幼児や外国人学習者は習得に時間がかかると思われる。また、成人でも意味が正確につかめず誤用が起りやすい。
[例] 煮詰まる(本来は「議論が出尽くして、結論に

近づくと」という意味だが、最近は「行き詰って、結論が出ない／先の見通しが立たない」という意味で使われることが増えてきた。

最後に語彙的アスペクト複合動詞と統語的複合動詞の連続性について歴史的な視点から述べる。語彙的複合動詞「～漏らす」の意味関係を歴史的に検討した結果、当初の主題関係複合動詞の意味関係が後代で許容されなくなり、同じ複合動詞にアスペクト複合動詞の意味関係が派生していることが明らかになった。このようなことから語彙的アスペクト複合動詞は主題関係複合動詞の意味関係を再解釈することから生まれるという推測が成り立つ。そしてそのような複合動詞には「聞き漏らす」「書き漏らす」を見ても分かるように素朴な言語的直観による解釈が付きまといっている。しかし統語的複合動詞における意味関係の解釈ではそのようなことは生じない。すなわちそれが意味の面から見た場合の語彙的複合動詞の限界なのではないだろうか。語彙的複合動詞における主題関係複合動詞と統語的複合動詞が対極にあるとして、語彙的アスペクト複合動詞が中間に存在すると見られるのは意味関係の解釈において両者の側からの意味関係の解釈が同時に重ね合わされているからではないだろうか。

参考文献

- 青木博史 (2013) 「複合動詞の歴史的変化」影山太郎編『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』ひつじ書房
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版
- 影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い—」影山太郎編『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』ひつじ書房
- 影山太郎編 (2013) 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』ひつじ書房
- 阪倉篤義 (1966) 『語構成の研究』角川書店
- 杉村泰 (2007) 「複合動詞「一忘れる」、「一落とす」、「一漏らす」の用法」『日語学習と研究』(中国日語教学研究会、对外経済貿易大学) 2006年第4期(総127期)
- 陳劭憐 (2013) 「語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性について—「～漏らす」」影山太郎編『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』ひつじ書房
- 西田隆政 (1989) 「和歌解釈と語義展開? 動詞「漏る」をめぐって—」『解釈』35-8
- 西田隆政 (1990) 「動詞「漏る」の用法展開をめぐって—抽象表現から具体表現へ—」『文学史研究』31
- 百留康晴 (2015) 「有対他動詞「漏らす」の派生について」『国語教育論叢』24
- Fukushima, Kazuhiko (2005) Lexical V-V Compounds in Japanese: Lexicon vs. Syntax. Language 81 (3)
- Matsumoto, Yo (1996) *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'*. Stanford: CSLI, Tokyo: Kuroshio.
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 柳田征司 (2011) 「意志動詞の無意志的用法」『日本語の歴史2 意志・無意志』武蔵野書院
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』ひつじ書房

調査資料一覧

上代・中古

万葉集 (『新編日本古典文学全集』小学館)

伊勢物語・大和物語・平中物語・源氏物語・落窪物語・枕草子・堤中納言物語・浜松中納言物語・狭衣物語語・夜の寝覚・栄花物語 (以上『日本古典文学大系』岩波書店)・土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・和泉式部日記・更級日記 (以上『新日本古典文学大系』岩波書店)・宇津保物語 (室城秀之・西端幸雄・江戸英雄・稲貝直子・志甫由紀恵・中村一夫共編『うつほ物語の総合研究1 本文編』勉誠出版)

中世

保元物語・平治物語・宇治拾遺物語・方丈記・曾我物語・義経記・徒然草 (以上『日本古典文学大系』岩波書店)・平家物語 (『新日本古典文学大系』岩波書店)・発心集 (高尾稔・長嶋正久編『発心集本文・自立語索引』清文堂)・閑居友 (峰岸明・王朝文学研究会編『閑居友本文及び総索引』笠間書院)・海道記 (鈴木一彦・猿田知之・中山緑朗『海道記総索引』明治書院)・東関紀行 (江口正弘監修・熊本女子大学国語学研究室編『東関紀行本文及び総索引』笠間書院)・十訓抄 (泉基博『十訓抄本文と索引』笠間書院)・十六夜日記 (江口正弘編『十六夜日記校本及び総索引』笠間書院)・とはずがたり (辻村敏樹編『とはずがたり総索引 本文篇』笠間書院)・太平記 (西端幸雄・志甫由紀恵編『土井本太平記本文及び語彙索引 本文篇』勉誠社)

・ジャパンナレッジ『新編日本古典文学全集』小学館
・国文学研究資料館『大系本文 (日本古典文学) データベース』<http://base3.nijl.ac.jp/>